

英国教会のパレスチナ宣教に見る伝道と植民地主義の関係

パウロ真野玄範

■ 1. 伝道運動と植民地主義の関係に対する見方について

植民地主義とキリスト教伝道の関係について、塚田理は『日本聖公会の形成と課題』（1978）で、次のように書いている：

「西欧キリスト教圏からの、アジア、アフリカ地域に対する伝道運動に対して、近年厳しい批判や反省が加えられてきているが、特に植民地主義との提携の非を、過度に強調することは慎まなければならないであろう。確かに結果的にそうなったとはいえ、伝道協会の主観的意識からいえば、少なくとも政府との直接的な関係はなく、むしろ神の伝道の召命への服従を、第一義的にその使命として受けとめたことは、全く確かなことである。」

このような理解は正しいだろうか。「結果的にそうなった」が、「主観的意識からいえば」純粹に福音宣教を行っていただけである、というように、政治的モチーフと宗教的モチーフは分離できるものだろうか？

例えばパレスチナ宣教に関して、塚田理は、「英国においては、1841年に、エルサレム主教座の設置に際して、“伝道主教”制度を定めた¹。この主教座は、パレスチナ地方に在住する英国人とドイツ・ルーテル派系の会衆を牧会するために設置することが提案されたものであった。当時のプロイセン国王は両教会の協力を強く希望し、英国教会側では、CMS²が中心になってこの計画を推進してきた」と書いている。

もし、ここで言われているように、主教座設置の目的が「パレスチナ地方に在住する英国人とドイツ・ルーテル派系の会衆を牧会するため」だったのであれば、パレスチナ宣教においては植民地主義との提携は「主観的意識からいえば」なかったと主張できよう。しかし、この事実認識は全面的に誤っているのである。1887年3月25日、ランベス宮殿のチャペルで行われた第四代主教の按手式の説教³で、パレスチナ宣教が始まった経緯が述べられているので対照させてみよう⁴。ちなみに、説教者は、後に第二代日本伝道主教となって「日本聖公会の父」と呼ばれた、エドワード・ビカステス主教（当時は司祭）である⁵。

1 P.61-62「エルサレム主教座の設置に際して“伝道主教”制度を定めた」（それが日本で適用された）と述べられたのは“エルサレム条例”(1841)の条文からの推測であろう。1887年の説教で、「ギリシア正教会のエルサレム総主教の要望により、この派遣からは“エルサレム主教”でなく、“エルサレム及び近東における英国教会主教”と呼ぶことにする。すなわち、彼は、ニジェール、中央アフリカ、マダガスカル、日本、その他の地におけるのと同様に、伝道主教となるのである」とある。エルサレムに置かれる英国教会の主教が「伝道主教」となったのは、日本よりも後のことなのである。設置の時点では、後述するように、聖ヤコブに始まる「エルサレム主教座」を継ぐ主教という意味が大きかった。エルサレム条例は伝道主教制度を支える法令のひとつであって、伝道主教制度そのものを定めたものではなかった。

2 Church Mission Society。異教徒に聖書の知識を広めることを目的として1799年に設立されたローチャーチ系の伝道協会。

3 説教：http://anglicanhistory.org/me/bickersteth_blyth1887.html

4 ビカステス師の説教の背景や、言われていることの詳細については、Fr. Dr. Hanna Kildani, "History of Modern Christianity in the Holy Land", 1992 を主に参考にした：http://www.geocities.com/modernjopa/En-Anglican-Negotiation.htm#_ftn28

5 ビカステス主教(Edward Bickersteth)は、1893年(明治26年)に来日し、「日本聖公会」成立に力を尽くされ、1897年(明治30年)に死去された。

■ 2. パレスチナ宣教の展開の実際

2.1 ビカステス師の説教における「伝道」理解

マタイ 6 章 10 節の主の祈りから取られた「御国が来ますように」という題のもと、はじめに回心者の獲得と神の国の実現が結びつけられて伝道のための祈りが奨励され、次いでパレスチナ宣教の歴史的経緯が振り返られている。

「我々が、ここでその到来のために祈るよう教えられている王国とは、我々の主イエス・キリストを頭とする恵みの王国、主が聖霊によってこの世界から徐々に形成している王国、選ばれた人間の数が満たされるまで増大し、繁栄する王国のことです。このことは、皆さんに長々とお話する必要はないでしょう。」

「しかし、何がこの王国の到来を妨げているのでしょうか？サタンの王国の、暗闇と邪悪の王国の、敵対的な力です。ですから、キリストの王国の到来を信じ、それを真に望む人は誰でも、主の真理の知識を世界中に広げるために熱意を持って働かなければならないのです。」

この説教では「サタンの王国」がイスラム教などと明示的には結びつけられていないものの⁶、パレスチナ宣教という文脈で行われたことを考えると、その〈キリスト再臨 - 世界伝道 - 悪との戦い〉という図式は今日の米国の宗教右翼のそれと紙一重に見えないだろうか？それは極論だろうか？

2.2 プロイセン国王の動機

ビカステス師は、エルサレムに主教座を設置する計画はプロイセン国王ヴィルヘルム四世 (King Friedrich Wilhelm IV, 1840-1861) の提案に始まったことを述べ⁷、「聖地の貧困に喘ぐパレスチナ人クリスチャンが置かれている状況の改善を若いときから考えていたこと」、また「全てのキリスト者の力を結集して、パレスチナの諸聖所をキリスト者の手に取り戻すこと」、「聖地においてキリスト教会の真の一致と普公性 (catholicity) をあらわすこと」が動機であったとしている。

若い頃から宗教的な関心が強かったヴィルヘルム四世は、プロテスタント諸教会の一致に関心を持ち、そのためには主教制が回復されなければならないと考えていた⁸。主教制を保持する英国教会と共同してエルサレム主教座を設置することは、プロテスタント諸教会の一致を進めるのに役立ち、それによって（非聖書的な迷妄に陥っている東方諸教会やローマ・カトリックに代わって）真のキリスト教会が聖地に回復されると考えられた。それが「聖地においてキリスト教会の真の一致と普公性をあらわすこと」が意味していたことである。

この共同プロジェクトは、また、オスマン帝国に、ギリシア正教会、ローマカトリックと対等な勢力としてプロテスタント教会を認めさせることにも役立つと考えられた。オスマン帝国は、イスラム以外の宗教共同体をミレット (millet) として一定の自治をゆるしつつ支配していたが、プロテスタント諸教会が分裂したままでは、その信仰共同体を別個にミレットとして認めさせるのは難しいと考えら

6 CMS では、1824 年に聖書の輸入・配布を禁じたオスマン帝国の皇帝、プロテスタントの聖書の使用を禁じたローマ教皇、マロナイトの総主教を、「アンチ・キリスト」と呼んでいた。

7 プロイセンからの提案を受ける前、英国では、地中海を囲む地域でフランスとの 25 年にわたる戦争における戦線と共に広がっていた宣教師の活動地域 (Mediterranean basin) を管轄する主教を立てる案が検討されていた。

8 プロテスタント教会の一致のためにプロテスタント諸教会の主教制回復が必要であるという考えを最初に提起したのは、プロイセン国王フリードリッヒ一世で、1701 年のことであった。

れたのである。プロテスタントのミレットを認めさせ、プロテスタント教会の恒常的プレゼンスが聖地に確立されること、それが「全てのキリスト者の力を結集して、パレスチナの諸聖所をキリスト者の手に取り戻すこと」の意味していたことである。

これには英国にとってもプロイセンにとっても東方における覇権争いの足がかりの確保としての意味もあった。ギリシア正教会のミレットにはロシアが、ローマ・カトリックのミレットにはフランスが庇護を与えていて⁹、聖地に「東方問題」が凝縮してあらわれたのである。当時、死に体であったオスマン帝国を舞台に、ドイツ・オーストリアの「汎ゲルマン主義」とロシアの「汎スラヴ主義」、エジプトとオスマン帝国の紛争およびそれに関わる英仏の中近東政策、ロシアの南下政策と英国の帝国主義政策等の諸対立が重なり合っていた。東方における覇権争いで後発であったドイツは1841年の時点では英国と利害関係の衝突がなく、足がかりを探していた時期にあった。なお、1883年に第三代主教が死去するとプロイセンは協力関係を打ち切るが、その背景には、信仰と職制に関わる相互理解が進まず、現場で協力の実質がなくなっていたことだけでなく、英国の「3C政策」とドイツの「3B政策」が対立する状況になっていたことも大きかったと考えられる¹⁰。

また、ピカステス師の説教では語られていないが、ドイツにおける「ユダヤ人問題」もプロイセン王の提案の背景として重要である。ヨーロッパではフランス革命以来、ユダヤ人の政治的解放と関わって「ユダヤ人問題」が起きて、当時のドイツでは政治・経済と関わって一つの焦点となっていた（ブルーノ・バウアーの『ユダヤ人問題について』が1843年、カール・マルクスの『ユダヤ人問題によせて』が1844年に書かれた）。ヴィルヘルム四世は、1840年に聖地に関するプロジェクトを最初にオーストリアに持ちかけたが、その時の提案に世界中のユダヤ人を集めてエルサレムに住まわせる計画が含まれていた。なお、英国教会のパレスチナ宣教を主導した「ユダヤ人伝道協会」¹¹の姉妹協会は1822年にはプロイセンで設立されてプロイセン政府の支援を受けて活動を始めていたが、ユダヤ人伝道協会もまた、「ユダヤ人問題」に対して同様な解答を提起していた。すなわち、シオニズムである。

2.3 「ユダヤ人改宗」と「イスラエル再建」という動機

ピカステス師は、プロイセン国王がパレスチナ宣教を思い立ったとき、英国教会のユダヤ人伝道協会がパレスチナで既に活動していて、シオンの丘に教会を建設中であったこと¹²、プロイセン王はそれを支援してパレスチナおよび近東における宣教の合同拠点とすることを決め、エルサレムに主教座を置くための資金拠出を決めたと述べている¹³。

9 当初は自国の商人を対象として、その居留国の法律に代えて自国の法律を適用する権限に関する合意であったのが、キリスト教のミレットを対象として庇護を与えた(Ottoman Capitulation system)。フランスは中世以来の聖地諸教会の庇護者を自認していたので、ロシアの動き、英国とプロイセンの動きは、フランスが聖地で伝統的に享受してきた権利と名誉を侵すものと捉えた。

10 「3C政策」「3B政策」という言葉自体は後世のもの。「3C政策」とは、19世紀後半から20世紀前半において英国が推進した世界政策で、カイロ、ケープタウン、カルカッタを結ぶ世界政策をいう。アフリカ大陸を南北に縦貫し、あわせて「インドへの道」を南北双方から確保することを目的とした。「3B政策」は、ベルリン、ビザンティウム、バグダードを鉄道で結ぶという19世紀末からのドイツ帝国の長期戦略とされるもの。鉄道建設と、それに付随する沿線の港湾整備や殖産興業を通じて近東に資本を投下し、自国の経済圏に組み込むことを目的とした。

11 The London Society for Promoting Christianity Among the Jews (LJS), 1795年設立のLondon Missionary SocietyのメンバーJoseph Samuel Frey(ドイツ生まれの改宗ユダヤ人)が1801年にユダヤ人伝道を始め、1809年に独立、1815年に英国教会の伝道協会となる。1812年にはパレスチナでの活動を計画。現在は名称を"The Churches Ministry among Jewish people (CMJ)"としていて、宣教師250人を派遣する有数の規模の伝道協会である。サイト<http://www.cmj.org.uk/home>

12 この聖堂建設はオスマン帝国の法に反していたため、建設は中止させられた。

13 15000ポンド拠出された。その利息から年600ポンドが「エルサレム主教」の給与に充てられた。これを受けて英国側でもユダヤ人伝道協会からの3千ポンドをはじめとして計2万ポンドの寄付が集まった。

英国女王はプロイセン国王の提案に賛同し、外相パーマストン卿¹⁴は縁戚関係にあったシャフツベリー伯爵¹⁵に扱いを委ねた。パーマストン卿は政治的な意義を認めて推進する立場をとったが、自身は宗教に無関心であって、シャフツベリー伯爵がユダヤ人伝道協会の会長であった他、CMSなどの諸伝道協会に後援者として繋がりを持っていたためである。ビカステス師は、説教で、シャフツベリー伯爵が自身の影響力に加え、多くの友人の影響力を用いて計画の実現を助けたことを強調している。

当時、ユダヤ人伝道協会は、カンタベリー大主教、ウィリアム・ウィルバーフォースなど多くの有力者が会員に名を連ね、英国教会で影響力を持っていた。初期パレスチナ宣教では、「まずユダヤ人を」という宣教方針に立っていたユダヤ人伝道協会に限らず¹⁶、多くの場合、千年王国論的な「イスラエル再建」が主要動機とされ、伝道対象はユダヤ人であった¹⁷。シャフツベリー伯爵はその筆頭で、全てのユダヤ人がパレスチナに移住し、イスラエルが再建されることが、聖書の文字通りの解釈では明らかである神の計画であり、それがキリスト再臨の条件であるとするシオニズムの信奉者¹⁸であった。

シャフツベリー伯爵はユダヤ人の同化（英国国民化）に反対し、シオニズムが植民地化の最も安上がりで早い方法であると主張し、パーマストン卿に働きかけて、一連の中東政策の実現に影響を与えていた。1839年にエルサレムに英国領事館が開かれたこと¹⁹、その役割としてユダヤ人の庇護に重点が置かれたことも²⁰、シャフツベリー伯爵の働きかけによるところが大きいとされている。フランスやロシアに対抗して、英国はユダヤ教徒のミレットに庇護を与え、また伝道によってプロテスタントのミレットを作りだし²¹、それらを通してパレスチナにおける宗教的かつ政治的な影響力を築こうとしたのである。1839年3月14日、初代領事ヤングはパーマストン卿に宛てて、次のように書いている：

「閣下、この地の将来についての発言権が自らにあると、お気づきの二派が考えることは確実です。すなわち神が初めにこの地を所有するよう与えたユダヤ人と、その正統なる子孫であるプロテスタントのクリスチャンです。謹んで申し上げますが、大英帝国が両者の庇護者であることは自然なことと思われまふ。彼らは他の者たちの間にあって、自らが占めるべき場所を主張し始めています。」

14 Henry John Temple, 3rd Viscount Palmerston, 1784-1865.「大英帝国」の最盛期を担った政治家。1830-34, 1835-41, 1846-51に外相を務め、1855-58, 1859-65に首相を務めた。「砲艦外交」と呼ばれるようになった自由主義的介入主義の外交政策をとり、民族自決主義の支持者だった。宗教には無関心だったことで知られる。エルサレム主教座設置を支持したのは、その政治的な意義を評価したからである。パーマストン卿はオスマン帝国の維持がロシアとフランスの覇権拡大を阻止する鍵であると考えて中東で一連の介入政策に訴えた。ロシアの中央アジア進出をとめるためのアフガニスタン介入、中国とのアヘン戦争も、彼のイニシアティブであった。

15 シャフツベリー卿 (Anthony Ashley-Cooper, 7th Earl of Shaftesbury, 1801-1885) は、児童労働の禁止などに尽くした博愛主義活動家として知られる 19 世紀の英国を代表する人物。1835 年にユダヤ人伝道協会に加わって会長として終生活動した。

16 アメリカン・ボード (The American Board of Commissioners for Foreign Missions) による最初のパレスチナ宣教 (1819-1821) もユダヤ人をターゲットにしていた。マルタにあった中東宣教の拠点で働いていた CMS の宣教師 Cleardo Naudi と William Jowett も、その頃、パレスチナのユダヤ人への伝道を呼びかけている。

17 1822 年にパレスチナ入りしたユダヤ人伝道協会の宣教師ジョセフ・ウルフ (Joseph Wolf, ドイツ生まれの改宗ユダヤ人) によると、当時エルサレムには 700 家族のユダヤ人が住み、5 つのシナゴグがあった。

18 当時の言葉では「イスラエル再建 (Restoration)」提唱者

19 初代領事 William Tanner Young が任命されたのは 1838 年。中東の総領事はアレクサンドリアにいた。英国は、モハメッド・アリをレバント地方から追い出し、オスマン帝国の支配を回復した見返りに、エルサレムに領事館を置くことを認めさせた。

20 2 代目 (1846-63) の領事 James Finn とその妻 Elizabeth Finn も、パレスチナにユダヤ人の入植を進めることを使命と考えて献身した。ロシアやオーストリアからパレスチナに巡礼に来て、庇護を受けられる期間を過ぎても帰国の意志がないユダヤ人たちに英国の庇護を受けられる証書を大量に発行した。それに対して、ロシア皇帝ニコラス一世は、ロシアのユダヤ人が全てパレスチナに移住する期待を持ったという：<http://chass.colostate-pueblo.edu/history/seminar/finn.htm>

21 ユダヤ人伝道協会の宣教師 John Nicolayson の活動によって改宗したユダヤ人の会衆が生まれつつあった。

1840年、パーマストン卿は駐イスタンブール大使に次のように書き送った。

「今、ヨーロッパに散在するユダヤ人の間に、パレスチナに戻る時が近づいているという考えが現れている。…もしサルタン（オスマン帝国皇帝）の招きによって、その支持と庇護の下にユダヤ人が帰還するならば、（エジプトの）モハメッド・アリやその後継者がどんな邪悪な計画を立てようとも、それを阻止する力になるだろう。…それゆえ、貴官にあっては、ヨーロッパのユダヤ人のパレスチナ帰還を促すあらゆる措置を取るよう働きかけて頂きたい。」

1841年8月、エルサレム主教座の設置に関する基本原則に関する合意に英普政府は調印²²、英国教会もそれを承認した²³。しかし、直後に英国の政権が替わって、外相となったアバーディーン卿はフランスとの協調路線に転換し、エルサレム主教座の設置に対しても消極的な姿勢を取った。カンタベリー大主教とアバーディーン外相は、オスマン帝国との衝突を招かないために他教会信徒やイスラム教徒への伝道をせぬように初代エルサレム主教に助言したが、そこにも外交政策の転換の反映が見られるのかもしれない。

1841年11月、ユダヤ人伝道協会の宣教師マイケル・ソロモン・アレキサンダー²⁴が主教に按手され、エルサレムに派遣された(1841-45)。最初に名前が挙がったマッコール司祭²⁵は「聖ヤコブの主教座は、アブラハムの子孫が継ぐべきである」と言って辞退し、彼の推薦によって「英国で最も著名なヘブライ人クリスチャン」であったアレクサンダー師が選ばれた。彼にかけられた期待は、ユダヤ人との関係構築であり、「イスラエル再建」のための橋頭堡となることであった。ビカステス師は、「エウセビオスの教会史によると、エルサレムの最初の十五代の主教は、主の兄弟ヤコブに始まって、すべて割礼を受けたユダヤ人だったのであり、AD133年以来17世紀ぶりに（割礼を受けたユダヤ人である）アレキサンダーが主教に按手されたことは、興味深い」と説教で述べている。

22 エルサレム主教座はプロイセンと英国の合同教会ではなくて英国教会の主教座であること、プロイセンのコミュニティを庇護することなど。1841年12月のカンタベリー大主教の声明では、さらに具体的な詳細が報告された：エルサレム主教はプロイセンと英国の王室が交互に任命すること、英国教会の典礼によって任職されたドイツ人牧師による牧会が行われること、プロイセンの福音主義教会のリタジーがカンタベリー大主教の承認を受けて祈祷書に入れられること、ドイツ人会衆の堅信礼は主教によって英国教会の典礼に従って行われることなど。

23 エルサレム主教座の設置を巡っては、英国教会内で大きな論争が起こった：

○エルサレム主教座の設置を支持したのは、(1)ユダヤ人問題とユダヤ人伝道に関心を持っていた人々、(2)プロテスタント諸教会との連帯、英国教会のプロテスタント的性格の強化に関心を持ち、カトリックの流れに抗して、トラクタリアン運動(The Tractarian Movement/オクスフォード運動)と対立していた人々、(3)プロイセン王の取り組みを、英国教会が保つ主教制とカトリック的伝統をプロイセンのプロテスタント教会に回復する機会と捉えた、ハイチャーチの司祭たち、であった。トラクタリアンでも、英国教会のカトリック的権威の強化になると考えて、支持した人々もいた。(1)と(2)に分類される人々は重なっていて、当時強かった千年王国論的終末論によって強い動機付けを得ていた(キリストが再臨するときに自分たちを代表する主教がエルサレムで出迎えなければ、という素朴な動機、またはイスラエル再建がキリストの再臨を早めるという動機)。

○エルサレム主教座の設置に反対したのは主にトラクタリアンで、(1)共同プロジェクトは主教制を放棄したプロテスタント教会との連帯を示す行為であって、それによって英国教会の使徒性が失われ、東方教会との関係構築もできなくなるという議論、(2)ルター派の教会に英国教会で継承されてきた主教制を「与える」ことが許せないという議論に加え、(3)エルサレム主教座の設置は正教会や東方諸教会の権利を侵して「教会分裂」を引き起こす愚挙であるという議論があった(当時、英国教会がパレスチナに寄せた関心のひとつは東方諸教会との関係作りであった)。

24 Michael Solomon Alexander, 1799-1845. ポーランド生まれの改宗ユダヤ人、ラビ。1820年に英国に移住してユダヤ人家庭で家庭教師をやっていたときに、イエスがユダヤの民のメシアであるという説を聞く。1825年にナザレのイエスがメシアであるという確信を得て改宗、英国教会の司祭となり、ユダヤ人伝道協会の宣教師としてプロイセン(1827-30)とロンドン(1831-41)で働き、新約聖書や祈祷書のヘブライ語訳を行った。

25 Dr. Alexander McCaul: 新約聖書と祈祷書のヘブライ語訳をアレキサンダー師と共にを行った。

主教按手式の翌日に行った説教で、アレキサンダー師は、次のように述べた²⁶。「少し前に、もうすぐ蔑まれたイスラエルの民の中の小さな者が英国教会のエルサレム主教として立てられてこの説教壇に立つだろうと言ったなら、全く不可能な馬鹿げた夢想として拒絶されたことでしょう。(中略)もう今は、イスラエルへの神の約束の文字通りの成就を敢えて疑おうとする人はいないでしょう。“神は人ではないから、偽ることはない。人の子ではないから、悔いることはない”のです(民23:19)。主がシオンを建てられるとき、シオンへの恵みの時が来ます。人がこしらえたものを迷信深く守り、先祖も彼らも負いきれなかった軛を捨て去ろうとしないシオンの子らは今は全く望みがないように思われても、天と地の神は、その力を現される日には、その民を罪から離れさせることがおできになるのです。“こうして全イスラエルが救われる”のです(ロマ11:26)。」

なお、ピカステス師の説教ではCMSは言及されないが、CMSがパレスチナに入ったのは1851年、第二代主教ゴバット師の要請を受けてのことである。CMSは1815年にマルタに拠点をつくり、そこからレバント地方に活動を展開し、ユダヤ人伝道協会に協力していたが、パレスチナはユダヤ人伝道協会が受け持ち、CMSはエジプトとエチオピアで活動していた。CMSがレバント地方に入った動機は、(1)ローマ・カトリックの宣教組織"Propaganda Fide"に対抗すること、(2)ナポレオンの東方遠征を阻むべく展開する英国の戦線に従って活動を広げること、そして、(3)イスラム教徒をはじめとする異教徒への光となるように、「東方教会の無知な兄弟たちの心と精神に信仰の灯りを再び灯すこと」への熱意であった²⁷。

1853年、シャフツベリー伯爵は首相アバーディーン卿に、「大シリアは“国民なき国(a country without a nation)”となっており、“国なき国民(a nation without a country)”を必要としている、すなわちユダヤ人を！」と訴えた。これはアレキサンダー・キース²⁸がパレスチナを視察した報告書で定式化してキリスト教シオニストの間で膾炙していたスローガン「民なき土地に、土地なき民を」の変奏である。このスローガンが半世紀後にユダヤ人シオニストによって使われることになる。



シャフツベリー伯爵に影響をうけた人に、ウィリアム・ヘクラー(1845-1931)、デイヴィッド・ロイド・ジョージ(1863-1945)、アーサー・バルフォア(1848-1930)がいる。

ヘクラーは駐ウィーン英国大使館付き英国教会チャプレンだったときにテオドール・ヘルツェルと知り合い、ヘルツェルを英国政府関係者と結びつけた。そして、第一次世界大戦中、英国首相デイヴィッド・ロイド・ジョージと、外相アーサー・バルフォアが、「バルフォア宣言」によって、「イスラエル」建国を後押ししたのであった。

26 http://anglicanhistory.org/me/alexander_farewell1841.html

27 Fr. Dr. Hanna Kildani, *ibid.*

28 Alexander Keith, 1781-1880. 1839年、パレスチナにユダヤ人の改宗とイスラエルの再建の可能性に関するスコットランド教会(長老派教会)の調査団に加わり、それに基づいて『アブラハム、イサク、ヤコブとの契約によるイスラエルの地(The Land of Israel According to the Covenant with Abraham, with Isaac, and with Jacob)』(1844)を著した。なお、1843年の分婁でスコットランド教会を離れてスコットランド・フリーチャーチの設立に参加している。：“The Israelites continued not in the first covenant which the Lord made with them : therefore are they wanderers throughout the world, who have nowhere found a place on which the sole of their foot could rest—a people without a country ; even as their own land, as subsequently to be shown, is in a great measure a country without a people. The one and the other have been smitten with a curse. But let that curse be taken away—let the Lord remember the people and remember the land, and there shall be no more scattering nor wandering, no more desolation, no more separation between Zion and her children.” (p.43 ※下線は筆者)

■メモ．パレスチナにおける聖公会の歴史の概観

※ レポート「英国教会のパレスチナ宣教に見る伝道と植民地主義の関係」の補足²⁹

(1) 1822-1840：ユダヤ人伝道協会や CMS の宣教師による模索の段階

オスマン帝国では、改宗することは政府による庇護を受けられなくなることを意味し、また改宗自体が法律によって禁じられていた。西欧プロテスタント諸教会の宣教師たちは主に聖書配布を行っていたが、はかばかしい成果をあげることは望むべくもない状況であった。レバント地方（パレスチナを含む大シリア）のローマ・カトリック、マロナイト、ユダヤ教の宗教指導者たちがプロテスタント宣教師の活動に反発して騒擾が起るようになると、1824年、オスマン帝国は聖書の持ち込みを禁ずる勅令を出した。また、ローマ・カトリックやマロナイトでは、宣教師が配った聖書を使う者に破門の措置で臨んだ。1831年にレバント地方をモハメッド・アリが占領すると、西欧の伝道協会が活動する可能性が開かれ、1840年にアリが敗退した後もオスマン帝国は支配回復に協力した見返りに伝道活動の継続を「黙認」するようになった。

* 1819-1821 アメリカンボードの Pliny Fisk and Levy Parsons

* 1820 ユダヤ人伝道協会の Melchoir Tschoudy（スイス人牧師）

* 1821-22, 1823 ユダヤ人伝道協会の Joseph Wolff³⁰:パレスチナ宣教の基礎を作った。ウルフが行く先々で語った目的は、ユダヤ人に福音を伝えることに加え、東方諸教会と英国教会の連絡関係を付けることであった。ウルフの伝道をもって、実質的な宣教が始まったと評価されている。

* 1825-26 ユダヤ人伝道協会の Dr George Dalton（医師、エルサレムについて1ヶ月で死去）

* 1826-56 ユダヤ人伝道協会の John Nicolayson（デンマーク人）：1833年にエルサレムに住む最初のプロテスタントとなった。それまでは許されていなかった。ユダヤ人伝道のための教会建設を提案し、1838年に土地を取得、後にそこに最初のプロテスタント教会であるクライストチャーチが建てられた。

* 1833 ユダヤ人伝道協会の拠点がエルサレムに設立される。1823年にウルフが計画したこの実現。

(2) 1841-1886：プロイセンと共同でエルサレムに「エルサレム主教」を置いた段階

1841年、レバント地方の政治情勢の変化を受け、プロイセンと英国は共同でエルサレムに主教座を置いた（シリア、カルデア、エジプト、エチオピアを管轄）。英普のエルサレム主教座設置の影響を抑えるため、ローマ・カトリックは1847年にエルサレムに総大司教の座を再設置した³¹。

* ユダヤ人のための職業訓練校 (House of Industry)、ヘブライ語大学 (Hebrew College)、病院などを設立。

1846年、プロイセン側からの推薦で、CMSの宣教師として長年エチオピアで働いていたゴバット師³²が第二代主教に着任(1846-79)。

29 参考にしたのは、主に、中東聖公会エルサレム教区の公式サイトに記された歴史的沿革 -(1)、及び "History of Modern Christianity in the Holy Land" (Fr. Dr. Hanna Kildani, 1992) -(2)、及びクライストチャーチのサイトに過去に掲載されていた関係者のバイオグラフィー。

(1) http://www.j-diocese.org/about_history?th=2

(2) <http://www.geocities.com/modernjopa/En-index.htm>

30 ドイツ生まれのユダヤ人、ラビの息子。ローマカトリックの Propaganda Fide College で学んでいたがプロテスタント傾向を咎められて退学させられ、ユダヤ人伝道協会の宣教師となる。

31 1099-1187年に十字軍がエルサレムを支配していた間、ローマカトリックの総大司教座 (Latin Patriarchate) が置かれていた。その間、ギリシア正教のエルサレム総主教はコンスタンティノーブルに追い出されていた。

32 Bishop Samuel Gobat（スイス人）, 1799-1881

1847年、英国大使カウリー卿の要望が聞き入れられ、オスマン帝国皇帝は「寛容令」を出し、東方教会の信徒は、自らを「プロテスタント」として登録して、帝国から同様な庇護を受けられることになった。アラブ人への福音伝道に情熱を持っていたゴバット主教はCMSに協力を要請し、正教会信徒への伝道に着手した。

CMSは1851年にパレスチナでの宣教に参入するにあたって、アメリカンボードとの間で各々の活動範囲について取り決め、アメリカンボードはレバント地方の北部、シリアとレバノン、CMSはレバント地方の南部、パレスチナを対象地域とした³³。

正教会信徒への伝道は正教会から猛反発を受け、カウリー卿を後継した英国大使カニング卿の周旋によってオスマン帝国政府は改宗者保護のための勅令を發布。英国内でもトラクタリアンからの反対が再燃。カンタベリー大主教は、誰に対してであれ福音を宣教することを禁ずることはできないし、英国教会の信徒となりたい者を拒むことはできないと述べ、ただし説教では注意を払い、一度に大人数の、または地域共同体単位の改宗者を受け入れることは避けるように助言した。

- * 1849年、クライストチャーチ献堂(Christ Church, Jaffa Gate)。シャフツベリー伯爵の貢献が大きい。ユダヤ人伝道協会系の会衆が使用。現在はエルサレム教区ではなく、ユダヤ人伝道協会系のIsrael Trust of the Anglican Church(Christ Church Ministries Jerusalem)のもとにある。
- * 42の学校が設立され、2人のパレスチナ人が司祭按手を受けた。
- * 1874年、聖パウロ教会献堂。CMSのもと、アラブ系の会衆が使用。
- * ドイツ人会衆は、当初は二週に一度、主日の午後クライストチャーチで、1871年に聖ヨハネ騎士団のホスピスのチャペルができると、そこに移って別個に礼拝を守った。

1881年、ユダヤ人伝道協会の宣教師としてイスタンブールとエルサレムで働いた経験があるパークレー師(Bishop Joseph Barclay, 1881-1883)が第三代主教に着任。既に顕わになっていた英普間の分裂、ユダヤ人伝道協会系とCMSの分裂などを收拾できないまま、1年半ほどで死去。

(3) 1887-1956：英国教会が単独で「エルサレム及び近東における英国教会主教」を置いた段階

第三代主教の死去と共にプロイセンは資金拠出を止めたが、英国教会は単独での再開を決め、1887年、第四代主教としてブリス師(Bishop Ven. George F. P. Blyth, 1887-1914)を派遣。資金はユダヤ人伝道協会とCMSが年300ポンドずつ拠出。

この1887年の再開時に、ギリシア正教会のエルサレム総主教からの要求を受け、主教のタイトルが「エルサレム主教」から「エルサレム及び近東における英国教会主教」に変更されたことは、非聖書的な迷信に陥っている東方諸教会に代わって真のキリスト教会を聖地に回復するのだ、といったような、当初の動機のひとつであった戦闘的な福音主義の立場は次第に後退させざるをえなかったことを反映していると思われる。

- * ユダヤ人伝道協会の宣教師ジョセフ・ウルフは、パレスチナのユダヤ人や東方教会信徒は、1822-23年には好意的に迎えてくれたが1892年に再び訪ねたときには暴力的な抵抗に遭ったと報告している。
- * 1898年、現在も主教座聖堂として使われている聖ジョージ大聖堂ができた。
- * 1905年、パレスチナ人の聖公会信徒が増えた結果として1905年にパレスチナ人教会協議会が生まれ、自治と自助のための取り組みが始まった。

33 第三次中東戦争まで米国の中東政策を握っていた米国国務省のアラビストは、この宣教師たちの流れを汲む人が多かったという。

* 1906年に日本人として近代最初の聖地旅行をした徳富蘆花が『順礼紀行』に西欧列強の聖地を巡る覇権争いの様子について記している：

「吾来る。見よ、千九百年は過ぎぬ。基督は在さず。残れるものは唯天の青、白き丘、而して徒に形のエルサレムの主たらんと争ふ人の子の卑劣のみ。吾が心、悲哀に満たされぬ。」

「エルサレムといわず、パレスティナ全地にもっとも多く寺院精舎の数を有するより云えば、ラテン・ギリキの旧教徒のものならん。古蹟に対する彼らの熱心は驚くべく、両派の古争いはほとんど血を流すまでに及びぬ。学校を設け、孤児院を建て、病院を経営し、宣教師を続派し、ないし商工に精励する英米独の新教国はまた各々エルサレムを人手には渡さじとす。ユダヤ人、回教徒、十字軍の子孫、皆様々にエルサレムを争う。誰かエルサレムの主たらん。眼前の景に余は正しく世界の現状を見ぬ。皆、天の寵児たらんとす。皆エルサレムの主たらんとす。」

(4) 1957-1974：カンタベリー大主教管区外管轄の下に置かれ、中東全体を司牧する首座主教がエルサレムに置かれた段階

(5) 1974-1976：「エルサレム教区」が設立された段階

根本的な教区再編が行われ、パレスチナ、ヨルダン、イスラエル、レバノン、シリアを範囲とする「エルサレム教区」が設立された。主教は「聖公会エルサレム主教 (Anglican Bishop in Jerusalem)」として聖地においてアングリカン・コミュニオンを代表する役割を、「エルサレム教区主教 (Bishop of the Episcopal Diocese of Jerusalem)」として教区を司牧する役割を担うようになった。レバノン、シリア、ヨルダンにおける司牧を助けるため、アンマンに副主教が置かれた。教区設立にあたって、英国教会の伝道協会 (CMS, CMJ, JMECA)、米国聖公会、アイルランド教会、スコットランド教会（長老派）、オーストラリア教会が協力関係にあった。

(6) 1976- 現在：エルサレム教区が「エルサレム・中東管区」の四教区の一つとなり、パレスチナ人の主教によって司牧されるようになった段階